

---

# HAPPENING!

koro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HAPPENING！

### 【Nコード】

N3850B

### 【作者名】

kor o

### 【あらすじ】

幸薄な少年とトラブルメイカーな少女が繰り広げる学園ラブコメ  
デュー

## 第零事：登場人物紹介（前書き）

この小説はkoroの第一作目です。未熟なので、誤字脱字や用法の間違いなどがあつたら、報告お願いします。もちろん感想もお待ちしております。

## 第零事：登場人物紹介

### 登場人物紹介

黒河 翔 クロカワ ショウ（15）

主人公

ルックスは上の下

成績は中の上

運動神経は中の下

趣味は「読書」

短黒髪黒目

幸薄ヘタレツツコミ少年

人前に出るのがニガテ

コメント

「こういうのは得意じゃないんだが…まあよろしく」

黒河 楼 クロカワ ロウ（14）

主人公の義妹

ルックスは上の上

成績は中の上

運動神経は中の中

趣味は「愚兄いびり」

毒舌料理ド下手少女

十二歳のときに孤児院から引き取られた双子の片割れ  
実は恥ずかしがりや

コメント

「……………（赤面）」

黒河 蓮 クロカワ レン（14）  
主人公の義弟  
それ以外はまだ謎な少年

瑞樹 亜衣 ミズキ アイ（15）  
メインヒロイン  
ルックスは上の上  
成績は下の中  
運動神経は中の中  
トラブルメイカー  
趣味は「お昼寝」  
長茶髪黒目  
コメント  
「zzz...」

五十嵐 純 イガラシ ジュン（15）  
誕生日が四月二日の元気少年  
身長は小さいが成績と運動神経は抜群  
カワイイといわれてもカッコイイとはいわれない「自称」悩み多き  
少年  
見かけによらずかなりのナンパ師  
趣味は「ナンパ」  
短黒髪灰目  
コメント  
「そこの姉ちゃん！ワイと遊ばへん？」

山吹 桜 ヤマブキ サクラ

まだ少し謎な人物

実年齢不詳

見た目は二十代前半

背は小柄だが出るところは出ている。  
天然

鬼島 吹雪 オニジマ フブキ

まだ少し謎な人物No2

実年齢不詳

見た目は三十代前半

背は高い&スタイル抜群

暴力女

e t c . . . .

## 第零事：登場人物紹介（後書き）

主要人物です

一応これからも新キャラが出たら随時更新していきます。

## 第1巻 第1部 受験編 プロローグ（前書き）

プロローグです。短いですが読んでやってください。



## 第壱事：第一部／受験編／プロローグ

俺はある建物を見上げていた…。

高校の校舎である。

なぜ見上げているのかというとこの校舎が大きいのとデザインが、よくて個性的悪くて変…な形をしていたからだ。

俺のほかにも同様な奴がいるので俺の感性が変でないことがわかる。と、いつでも俺とほかの奴らが感性が変。というのなら話は別だが

……

「つとこんな事しに来たんじゃなかったな…」

俺は本来の目的を思い出した。

俺は受験をしにきたのだった。

筆記試験と一次面接試験は市民ホールで行われていたので実際にここにくるのは初めてなのだ。

…無駄な時間を過ごしてしまった。

急がねば。あと試験開始まで一時間もない。

徐々に立ち直っている奴らもいたが、グロッキーしてしまったのか、固まったままの奴もいた。

…さらばだダメ男くん

~~~~~

何でこの学校は外観が変なら構造まで変なんだ!!!

入り口（と、思われる）ところにあつた地図を見たがさっぱりわからん。

適当に進んでいると

「おっ！」

どうやら面接会場までの矢印らしいのを見つけた。

それにしたがって進んでいった。

右

左

左

階段を上って

右

真直ぐ

・

・

・

・

・

そしてやっと（ほんとにやっと）それらしきドアまで来た。

もう後十分もない

…急がねば

そのドアを開けると…

「ん？」

中には誰もいなかった。

よくくみまわすと

ドアの裏に紙が張ってある事に気がついた。  
その紙をみると、

はずれ

「…何でやねんっ!!」

…前途多難な試験が始まった。

ちなみにその紙の裏には俺の反応を予測していたように

ヘタレだから

とかかっていた。

orz

つづく！

## 第貳事：布団少女（前書き）

さて、いよいよノってきましたこの小説！  
新キャラ登場です！！

誤字脱字報告や感想お待ちしております。

## 第貳事：布団少女

俺はその後どうにか立ち直り廊下を歩いていた。

…廊下といっても普通の廊下ではなく坂になつていたり穴があつたり一見普通の廊下に見えるところでも絵だつたりした。

やはり他の受験者も苦戦しているようで、坂の途中でへばつていたり、穴に落ちたり、壁にぶつかったりする姿がたびたび見受けられた。

中でも坂はきつかった。

だつて五十度近くあるんデスヨ！！！！

…もういじめとしか思えない（泣

それでも俺は齒をくいしばって坂を上り、穴に落ちても這い上がり、壁にぶつかつても鼻の痛みをこらえてひたすら歩いた。歩きつづけた。

もうかれこれ一時間ぐらい歩いたときだろうか、少し前の方に横たわっている人影が見えた。

近寄ってみるとそれは…

寝ている少女だった。

見事に寝ていた寝ていましたとも！

敷布団と掛け布団と枕ついでに抱き枕のオプションつきで！

…でもかなりかわいい顔をしているw

「~~~~っ何してるんだよ俺っ！」

そのとき、

「ほにゃ？」

というなぞの声と同時に少女は目を開けた

「……！」

俺はやバイツっと思い飛びずさった。

その少女は起き上がると周りを見回しこっちをじーっとみはじめた。

「……」

じー

「……」

じー

「……」

じー

そろそろ限界を感じていたとき。  
急にこちらに來ると

キュッ ……すう

今のはその少女が俺の右腕に抱きついた音とそのあと3カウントしない間に立てはじめた寝息だ。

ん？

マジッスカ！

少女は右腕に抱きついたまま離れない。

どうする？

どうするよ俺！？

1 . 引き剥がす

2 . 少女を起こす

3 ぶら下げたまま行く  
どくなるのよ俺っ！

つつく！

## 第貳事：布団少女（後書き）

パクリですね^^；ネタがなかったもんですから（汗  
次話は読者様が100人に達してからにします。  
楽しみに〜



## 第参事：眠り姫の対処法（前書き）

今回は読者様が百人を越えたので更新しました。  
まああんまり時間がかからなかったのは計算外でしたが、  
とてもうれしいです。

では、大惨事もとい第参事お楽しみください。

## 第参事：眠り姫の対処法

で、前回からの続きで選択を迫られた俺。  
どーするのっおっ…

そのネタはもうええわ！

でも、その少女にあまり胸がなかったのがせめての救いだろっか。  
もし少女が巨乳だったりしたら俺は赤い液体にまみれながら貧血で  
倒れていただろうからな…。

ふむ、話がそれだな…。

それから俺は3つの対処法にしぼりこんだ  
…………… 最後のはあまり使いたくないがな…

く 作戦N01少女を引き剥がせ！  
でわ始めよう…………

そのとき俺はある作戦の欠陥に気づいた。

ハッ！

引き剥がす〃少女に触れる  
マズイ！コレは非常にマズイ

詳しく説明してなかったがその少女はいまネグリジェ姿だ

…………… 触れるわけがない。

よしっ 次行こっ 次っ

そこっ！ 本末転倒なんていわないっ！

「作戦No2少女を起こせ！」

「…………おそらく皆様の想像どおりですハイ…………  
いくら声をかけても、ゆすつても、耳元で叫んでも、振り回しても、  
etc…………

まったく起きる気配がございませんっ（泣

……………負けた（泣

で、結局こうなるのか……………

まあ予想はしてただけどネ？

こんな罠だらけのところを右手が使えない状態で  
尚且つ（なおかつ）少女を守りながら進むのは無理ってモンがござ  
いますハイ。

「……………はあゝ、ま、ガン  
バリますかぁ」

俺は少女を右腕にぶら下げたまま進んでいった。  
もうコレ受験関係なくネエ？

つづく！

## 第参事：眠り姫の対処法（後書き）

読者様100人突破を記念して、トークショウを開きたいと思います。

koro（以下k）- 始めまして。作者のkoroです。

翔- 犬つころと覚えてやってくれ。

k- それはちよつと…。

翔- だってちげえねえだろ。友達からのあだ名、犬っていうときあったんだろ？

k- うつ古傷を…。

翔- まあそれはいいとして、これからどうなっていくんだ？

k- よくない！…他にもいっぱいキャラ出していきますよ。

翔- へえ。どんなのだ？

k- 変なの。

翔- …（睨んでいる）

k- （ビクッ）ま、まあ今回はこの辺で。

翔- ばつ俺はまだ言いたいことが…。

k- それではまたの機会に。さようなら～

#### 第四事：らすとすぱーと！（前書き）

五部更新！

誤字脱字報告や感想、アドバイスなどお待ちしています！  
今回は少し読みにくいかもしれませんがご容赦ください。



「……………き、」

「？」

「きゃああああ！！！！！！」

バキッ

ゴスッ

メリッ

ドゴッ

ボキッ

最後の音絶対折れた音だ！！！！

…試験終わるまで生きてるかな…俺……

「お、落ち着け」

そして状況説明

「かくかくしかじかで」 小説って便利だね！  
回想の冒頭に戻る…

~~~~~

というわけだ

とりあえず名前を聞くと

「亜衣、瑞樹 亜衣だよー亜衣様って呼びなさい」

「わかった、亜衣な」と俺が言くと

「む……！」

といってむくれていた

…子供かよ

「はいはい、亜衣様」

といいなおすと、

ニコツつと満面の笑みを見せてくれた

「！」

やべえ、いまグツつときた

いや、Mだからじゃないぞっ！

そしてやつと最後の坂らしいところまで来た

なぜわかるかというところのほうに豆粒みたいに面接会場と書かれた  
ドアがあつたの和其他の奴等

もあの扉を目指していたからだ。

すると亜衣が

「翔おゝ早くうゝ！」とせかしてきた

ブッコロスゾ！

俺はお前をぶら下げてたんだよ！！

「早くうゝ」

ギロツ！

「なんだあいつ？彼女イナイ暦〓年齢の俺らへのあてつけかあ？

（怒）

「ムカツクなあ！」

「ぐっ！羨ましいいいい！！！！」

「おい、あいつ潰そうぜ！！」

「くくくおう！！！！！！」

コワイヨー

ガタガタガタ

そして冒頭へ戻る



~~~~~

いま、膝が笑ってます

それは

坂のせいなのか（亜衣付）。

後ろから来る恐怖からか（嫉妬群）。

…わかりません（泣

でも、コレだけはいえる…

俺、もう死ぬかも（大泣

必死の思いで上りきるとパチンコ球が大量におかれていた。

ポクポクポク

チーン

許せよ…

じゃらじゃらじゃらー！

奴らは面白いくらい滑っている。

「ぎゃああああー！！」

「いつかぶつころしてやるー！！」

「黒河ああああ」

「ママァー」

訂正

ぜんぜん面白くないです。どちらかといつと地獄絵図  
でも最後のはちょっとなあ

ヒクなあ

「眠いよ」

「今さっき寝たばかりだろ！」

「つづく！」

#### 第四事…らすとすぱーと！（後書き）

次事は14日更新予定です。

## 第五事：理由（ワケ）（前書き）

大分、進んできました。

これからもがんばっていきましょうかと思いますので、感想やアドバイス  
待ってます。

## 第五事：理由（ワケ）

鉄の雪崩（パチンコ玉）で嫉妬狂い共を始末した後、一休みしていたときに、なぜあんなところで寝ていたのか尋ねてみた。

「なあ、亜衣？」

「ん？なに？」

「何であんなところであんな格好で寝てたんだ？」  
ちなみにもう着替えています。

「ん、つとね、実は…」

~~~~~  
side 亜衣の回想

眠くなつてきちゃったなあ…。  
どっかにいいところないかなあ？

「あれ？」

そういえばここどこだっけ？

まあいつか

とりあえず枕は持ってきたし、後は寝る場所だけなんだけどな

…そういえばここに何しに来たんだっけ？

「ま、いつかあ」

それよりお昼寝お昼寝

~~~~~

「それで、しばらく歩いていってもう限界つてときに布団と抱き枕

があつたの」

「……………」

やべえ、かなりツツコミたい…

「ってかあれmy枕だったのか？」

「うん！そうだよ」とっても寝心地がいいの翔も寝てみる？」

「…いや、遠慮しとく。」

俺としたことが、一瞬迷ってしまった…

一瞬だけだからな！

どうしてこいつは、こういうところには無頓着なのだろうか。

「で？翔は？」

「俺？」

「何で地図も持たずにあんなところ歩いてたの？」

「地図？」

「うん、受験票の裏に地図が書いてあるの」

「そうだったのか…。」

しかし、受験票の裏を見ても地図なんて書いていなかった。

「あれ？書いてないぞ？」

「もしかして翔って合格者なんじゃない？」

「……？」

「私は筆記試験は落ちちゃったんだけど一時面接試験で受かったからこつちの会場で試験を受ける権利をもらったの」

「ってことは他にも会場があるのか？」

「うん、合格者の人は西門から入ったところであるんだよ！ほら、ちゃんと書いてあるじゃん！」

よくみると日時の下に手書きで小さく

合格者なので試験会場は西門

…と、かいてあった

何で手書きやねん！

「…じゃあ亜衣のは？」

「コレだよ」

準合格者受験票

試験会場は東門から

今までの苦労はいつたい…

「あはは！よく見なかったからだよ」

orz

俺もう立ち直れんかも…

「でも、私は翔が間違えてくれてよかったかも」

「？」

「だって、翔が間違えたおかげで翔と会えたんだもん」

「っ！／＼／＼」

何でこいつはこういうことを平気でいえるのだろうか？

「えへへ」

つづく！

## 第五事：理由（ワケ）（後書き）

次事は今日の夜更新予定です。



**第六事：「後の祭り」っていうことわざを作った人は偉い！（前書き）**

登場人物紹介更新します。

誤字報告、アドバイス、感想まってまゝす！

## 第六事：「後の祭り」っていうことわざを作った人は偉い！

なにはともあれ俺たちは面接会場（？）の中に入ることにした。

…ちなみに俺の受験番号はN o 4 6 4 9のヨロシクナンバーで  
亜衣のはN o 4 2 7 4でシニヨナンバーだった。  
不吉だな…。

カチャッ

ドアを開くと中には面接官らしき女の人と一人の背の低い少年がいた。

何を話しているのか気になったので耳を傾けると、

「だからあゝ、ワイと遊ばぼって？」

面接官の人をナンパしていた。

今日は、碌なやつと会わんな…。

「え？え？あの〜？」

亜衣が声をかける

「ん？おお！美しい！ぜひワイとお付き合いを！」

ナンパ少年がいきなり亜衣に告白してきた！

「あつ！えっ！その…ごめんなさい小学生とはお付き合いできません…。」

亜衣の天然毒舌！ナンパ少年への効果はバツグンだ！

「ガーン」

つて口で言ってるし！

そうしてる間に面接官らしき人が話しかけてきた。

「ねえキミ？受験生よね？」

「はい、そうですけど…」

俺が答えると

「よかった〜そうじゃなかったらどうしようかと思っただよ」  
他にどんな奴がくるんだよっ！

「ん〜？さっきの子とか」

「ああ〜、って何でわかつたんですか!？」

「だって顔に出てたよ。ある意味サト レかもね〜」

「まじっすか？」

俺ってそんなにわかり易かったのか…

俺たちがそんな会話をしていると…

「ワイはこう見えても受験生やでえ〜」

「…本当に?」「…マジで?」

俺と亜衣と面接官の人がハモった。

「ああホンマや…」

俺たちがハモったことによつて、よけいへこんだようだ。

しかし、少年の身長はかなり小さく間違えるのも無理はない。

「ご、ごほんっ。では、面接試験を始めます」

「つと、あのちよつといいですか？」

俺は間違えたことを伝えようと思い、言った。

「はい、なんですか？」

「あの、俺、間違えちゃったみたいで…」

「…どういうこと？」

俺はこれまでのいきさつを話した。

…するとドアのところから。

「その話詳しく教えてくれない？」

と、いう声が聞こえてきた。

「あの、あなたは…?」

「ああ、安心して。ここの面接官のひとりよ」

「そうですかじゃあ…」

~~~~~

詳しいことを話し終えると

「ふ〜ん、なるほどねじゃああのパチンコ玉を使ったのはあなたなのね？」

なにかいやくな予感がしてきた。

「…はい」

「じゃあ、あそこに置いてあった私がすごく苦労してとつて後で交換しに行こうと楽しみにしていたパチンコ玉を使ったのはほんつと〜にあなたなのね？（怒）」

その場で交換しろよ…

「……はい」

「じゃあどうしてくれるのかなあ？」

「はい！すいませんでしたあ（泣）」

「…そんなことで許されると思ってるのか小僧？」

コワイヨー

ガタガタガタ

「私が！…！」

ベキツ！！

「どんだけ！…！！！」

メキメキメキ

「苦労したと！…！！！！！」

ゴキン！！！！！！

「おもつとるんじゃないああああ！！！！ヴォケがああ！！！！！！！！！！」  
ドゴツ！！！！！！

えーっと今の音は怒りのあまり鬼神と化してしまった面接官2（仮）が

殴って

絞め技かけて

それで俺の肩が脱臼して

その後、殴られた俺が壁にめり込んだ音です（泣

どんな力してんだよ！

…それでも意識を失わない、もとい失えない俺って…（大泣

つづく！

第六事：「後の祭り」っていうことわざを作った人は偉い！（後書き）

次事で第壱部～受験編～は終了です！  
次の更新は十五日の夜です。

## 第七事：第一部〈受験編〉エピローグ（前書き）

受験編の最後です。

誤字報告、アドバイス、感想まっています！

## 第七事：第一部／受験編／エピローグ

それから俺は山吹 桜 ヤマブキ サクラ教頭先生（面接官1の事だ）に応急処置をしてもらった。

ちなみに面接官2は鬼島 吹雪 オニジマ フブキといってあれでも校長なのだそうだ。

「おい」

鬼島校長が声をかけてきた。

「はいいい！」

いまださっきの恐怖が抜けきっていないので情けない返事をしてしまっ俺：

「お前のクラスが決まったぞ」

「え？まだ面接も何もしてないじゃないですか」

「1-Kな」

無視かいつ！

「ああ？なんか文句あるのかあ？」

「イエ、メッソウモナイ」

「ああ1-Kは私が担任してる特別クラスだから」

「はあ！？」

ギロツ！

ビツクウツ！

「あ、アハハッ、アナタノクラスナンテ、ウレシイナア」

「よろしい」

こ、怖ええゝ

「そうそう、他の二人もK組だから安心しろよ」



…どこをどう安心しろと？

そこで俺はあることに気がついた。

「特別クラスってどんなクラスなんですか？」

「ああ、中学で有名だった奴や私の気に入った奴、それとお前のようなイビリがいのある奴とかの集まりだ。正確には特殊クラスだな。」

不安だ…激しく不安だ……。

そこで、いままで黙っていたナンパ少年が口を開いた。

「なあ、自己紹介させてもらってもええ？」

「ん？別に俺はお前の事知りたくないから遠慮しとく」

「まあ、遠慮せんといてや。じゃ、いくでえ。ワイの名前は五十嵐 純 イガラシ ジュンや純って呼んでな。趣味はキレイなネエちゃんと遊ぶこととナンパ！でもかわええとはよく言われんねんけどかつこええって言われたことがない悩み多き少年やねん…。で好きな言葉は…「あーもういい！」」

「えゝ？、なんやおもないなあまだ三分の一も言っていないでえゝ？」

まだ三分の二もあるのかよ！

そんな会話をしていると、山吹教頭が

「そろそろ、帰ったほうがいいんじゃない？」

と、声をかけてくれた。

腕時計を見ると短い針が8少し過ぎたところを長い針が2を指していた。

「げっもう八時過ぎかよ！」

ちなみに俺が校門をくぐったのが三時半だったので五時間四十分もいた計算になる。

「そうだな、おい！そこにエレベーターがあるから乗れ」

「はい！」

「わかりましたあ」

「うい」

「つと、ちよつとまで」

なぜか俺だけ呼び止められた。

ニヤリ

またいやな予感が……

「私の努力の結晶を捨てた罰だ、お前は歩いて帰れ」

「…マジッス力？」

「ん？ああ、大マジ」

「俺あなたのせいで左肩脱臼してるんですが…」

「足は大丈夫なんだろう？ほら、さっさと行け」

「ゴメンネ？ほら、吹雪、いいだしたら聞かない性格だから」

「わかっただろ？ほら早く行け」

「ええ！？でも…「いいからさっさと行け！」」

「はいい！」

黒河少年が家に着いたのは日付が変わってからだったという…

第貳部～受験編～fin

第貳部～新生活編～へつづく！

**第七事：第一部〈受験編〉エピローグ（後書き）**

次は、第貳部でお会いしましょー。

## 第八事：第貳部〈新生活編〉プロローグ（前書き）

始まりました、新生活編！

この度読者様が壱千名を越えました！感謝しても仕切れません（感涙！）

誤字報告、アドバイス、感想待ってまーす

## 第八事：第貳部 新生活編 〱 プロローグ

朝起きてみると目の前にはどこかで見たことがあるような天井、背中には固く冷たい感触があった。

「ん？」

起き上がって周りを見るとそこは俺の家の玄関だった。

……… 何で俺、こんなところで寝てるんだ？  
そういえば……

「！」

思い出したくないものを思い出してしまった。

そう俺は昨日、受験に行って大変な目にあって  
帰ってきたら玄関で力尽きてしまったのだ。

…… 何で誰も起こしてくれなかったんだ？

俺には両親と義理の双子の弟と妹がいる。なのになぜ誰も起こしてくれなかったのだろうか？

俺は不思議に思い家の中を探した。

…… 何で誰もいないんだ！

両親の寝室、弟と妹の部屋、物置、屋根裏部屋 e t c . . . . .  
後はリビングのみ。

俺は警戒しつつドアノブに手をかけた。

……… なぜ警戒しているかという前にも一度、こういうことがあったからだ。

俺の誕生日（と、いつでも俺は気づいていなかったが）のときリビングに入ってきた俺をみんながクラッカーを鳴らして驚かした。  
その後、

「ハッピーバースデー……」  
と祝ってくれた。

あの時は思わず涙が出そうになったがもう驚かされるのは勘弁だ、  
寿命が縮む。

話がそれたな。

気を取り直して扉を開けると……

誰もいなかった……

リビングを見回すとテーブルの上に置手紙があるのを見つけた。  
内容はこうだ、

>翔、父さんと母さんは蓮 レンをつれてイギリスにいくぞ、夏休  
みには帰ってくるのでそれまで下の住所のマンションで暮らしてい  
なさい。もう荷物は送ってある。

町 ×台2丁目5-23-506

P・S・楼 ロウは先に行ってるぞ。 <

なあああにいいいい……！

あんの親父はまた……

いつか復讐してやる

とりあえず、この住所のところへ行かないとな……

こうして、不満と不安をたっぷり含んだ新生活は始まった。

つづく！

## 第八事：第貳部〈新生活編〉プロローグ（後書き）

読者様壹千名越え記念企画！

またトークショウです。

翔・えーっと、とりあえずこんばんは、かな？主人公の翔です。

亜衣（以下亜）・こんばんはあ、メインヒロインの亜衣でえーす。  
むにゃむにゃ

koro（以下k）・こんばんは！毎度おなじみkoroでえーす！

翔・いつからおなじみになったんだ、いつから！

k・今から

翔・（ギロリ）

k・（ビクッ）

亜・喧嘩はやめようよあー。

翔・あの、だからなこれは…

亜・これは？

翔・ううっ悪かったよ…

k・（ホッ）ではいよいよ始まりました、第貳部〈新生活編〉スタートしました。これは翔の学校始まるまでの話です。

翔・今回は新キャラは出ないんだろっな…？今回は俺、めちゃくちゃ酷い目にあっただからな？

k・今回はそんなに出来ませんよ。ただ、亜衣ちゃんのライバルが出現するってことぐらいですかね？

亜・ZZZZZZ………

k・あら、亜衣ちゃん寝ちゃいましたね、じゃあ今回はこの辺で。

翔・まで！ライバルってどういう…

k・はい！では、さよ～なら～

## 第九事：ハイテクマイホーム（前書き）

更新が遅れました。すいません

誤字脱字報告・感想・アドバイスなど待ってまーす。  
変更しました。

妹、楼のキャラを（無理やり）変えました。



## 第九事：ハイテクマイホーム

午後二時三十分俺は指定された場所へ来ていた。

「……」

なぜ無言かというと、目の前の「それ」に圧倒されていたからだ。

「それ」とは……超超高層マンションだ。

間違っていないか、もう一度写してきたメモを見る……。

間違っていない、俺はこの動作をもう八回も繰り返している。

ちなみに、交番にも行ったがここだといわれた。

「まあ、とりあえず入ってみるか、え〜つと506か……」

こんなに高いのに意外に普通なんだな。

共同玄関に入るとドアがなかった。

周りを見ると、パネルと一枚のプレートがあった。そのプレートには、

指紋と静脈の認証をするので、下のパネルに手をつけてください。

このマンションやべえ……。

手をつけると、漫画であるみたいに緑の線が通り過ぎる。

ピー！シモン、ジョウミヤクチェッククリア、ドアガヒラキマス。

機械的な声が流れると目の前の壁と思っていたところがスツッと開いた。

……スゲー！

気を取り直してエレベーターに乗る。（エスカレーターもあった）

なぜか、五階までしかボタンがなかったが五階に別のエレベーターがあるのだろうか？

待つこと五分……

「遅い！」

いくらなんでも遅すぎる、昇っている感覚はあるのだが一向につか

ない。

そうしていると…

チーン！

「やっかついたか…」

エレベーターから出るとそこは…

最上階だった……

「は？」

何でだ？

間違えたかと思ったが、ちゃんとプレートには5と書いてある。

「まあ、とりあえず行ってみるか。」

ここには、妹の楼がいるはずだ。

あいつのほう詳しいだろう…。

ここで少し、義理の妹弟のことを話しておこう

楼と蓮は俺が、中学一年、楼と蓮が小学六年のときに親父が孤児院からもらってきて出会った。

親父曰く「いい目」をしているらしい。

始めはなかなか、家族に溶け込めなかったが次第に馴染んでいった。楼と蓮はかなり特徴的な外見をしているせいで、一時期いじめられていた時期があった。

…二人とも、銀髪に蒼目なのだ。

そのときに、いろいろ構ってやったからだろうか、今では懐かれて

いる。

そんなことを考えていると、506号室の前まで来た。

インターホンを押す。

ピンポン！

『……誰だ？』

楼の声が聞こえる。どうやら、間違っではないなさそうだ。

「俺だ、俺。」

『俺俺詐欺ですか。そうですか。他をあたってください』

「まてまてまてまて！」

『本当に愚兄かあ？じゃあテストだ』

「テストってだから俺だって、翔だ！」

『問題1、私の愚兄の身長は何センチ？』

「無視すんなああ！！！」

『そ、そのツツコミは…愚兄か。だったら早く言えばよかったのに…』

「今さっきから何回も言ってるぞ！」

『じゃ、開けるぞ。』

「無視するんじゃねえええ！」

つづく！

## 第九事：ハイテクマイホーム（後書き）

次事は記念すべき第拾事です！

## 第拾事：毒女もとい毒妹（前書き）

かなり更新が遅れてしまいました。

まことに申し訳ございません。

言い訳がましいですが風邪をこじらせてしまつて遅れました。

ホントーにすいませんこれからもHAPPENING！よろしく願います。

## 第拾事：毒女もとい毒妹

カチャカチャ

…ガチャツ

扉が開く

その中からは案の定見慣れたマイシスターが現れた。

「…ただいまかな？マイシスター？」

「…お帰りなさいかな？愚兄？」

…ああそうだったこいつはこういう奴だったな  
こいつが俺のマイシスターこと楼だ。

いつからかこういう毒舌ばかり吐くようになった。

…いやなってしまった、だな…

「俺はいくら血がつながってないとはいえ兄にそんなことを言う妹に育てた覚えはない」

「ああ、私はお前に育てられた覚えはないぞ、愚兄」

「…愚兄いうな楼」

「事実なのだからしょうがないだろう？ヘタレ愚兄」

「ヘタレいうな…ついでに愚兄も」

「ふむ、じゃあ変態翔」

「いやまて、何故呼び捨て？何故変態？」

「愚兄と言ふなとお前がいったんだろう？変態は事実だからだ」

「呼び捨てはともかく変態は納得いかん！」

「お前の部屋の二番目の引き出しの二重底の中…」

「何で知ってっ…すいませんでした」

あの…ほっほら、俺も健全な十五歳ってことで

その…隠してるものもあるわけで…

「ん？聞こえんぞ？ほらもっと大きい声で」

「すみませんでした」

「もつとだ」

「ああもう！…すみませんでしたあ！！！！」

「よろしい」

こゝ、こんにやろう！

人の机の中を勝手に見やがって！

「いや？たまたまお前が見ている所をみかけてな…」

「覗き見てんじゃネエ！しかも何でわかった！？」

「声に出てたぞ変態翔」

「変態翔いうな！」

「なら愚兄に戻すが？」

「…もうそれでいい」

認めてしまった…

これからどうなることやら…

---

場所は変わってこの家のリビング

俺はこの料理を前にして脂汗をかいていた…

そう、お約束どおりマイシスターは料理が壊滅的に下手なのだ…

…いや、もうコレは料理ではない毒物だ。

「で？楼、コレは何だ？」

「ん？カレーライスだ。」

「今すぐ全世界のカレーに謝れ」

「なぜだ？立派なカレーではないか」

「いや。俺は認めんぞ…少なくとも俺は食わん！」

「こんなに美味しそうな色でわないか」

「紫色がそうだというならいますぐ精神科行って来い」

「湯気も立ち上ってるぞ？」

「それは瘴気だ」

「匂いもいいではないか？」

「まるでありとあらゆる腐敗物を混ぜたような臭いだ」

「どうしても食わんのか？」

「絶対に食わん！」

「むう…ならば仕方ない」

そついうと楼は指を鳴らした

パチッ

…ガシヤ

「……これはどういうことだ？楼よ？」

この忌々しいハイテクハウスには拘束機能までついているようだ。

「こうなったら嫌でも食わすだけだ」

死の宣告をすると楼はまるで悪魔も裸足で逃げ出しそうな笑みを作った

ニヤリ

口が無理やりこじ開けられる。

パクッ…

「グハッ…」

体が麻痺していくのがわかった。

意識が暗転していく……………

もう駄目だ…

つづく！



## 第拾事：毒女もとい毒妹（後書き）

今回は第拾事でした。

いかがだったでしょうか紹介も更新する予定なので見てやってください。

それから、今回は第十話目ですので次事は番外編を書こうかと思えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3850b/>

---

HAPPENING!

2010年10月11日01時17分発行